

神戸の放置竹林、官民で対策本格化 伐採体験や製品化、新たな活用法研究も〈ローカル+α〉

2025/8/1 05:30

社会 ローカル+α 神戸



人の手が入らなくなった放置竹林で、神戸市は伐採体験を開いている＝神戸市須磨区多井畑



周囲に悪影響を及ぼす放置竹林が各地で問題となる中、神戸市内でも対策が本格化している。市が都市近郊の里山で伐採体験のイベントを開き、大学生らはプロジェクトを立ち上げて竹製品を商品化した。竹は成長が早い上、伐採にはコストと手間がかかる。対策の後押しには竹の使い道拡大も求められる。大量消費が期待できる堆肥への活用も研究が進んでいる。（若林幹夫）

■体験会で課題発信

6月上旬、同市須磨区と垂水区にまたがる多井畑西地区の里山で、親子連れや高校生ら23人がのこぎりを持って荒れたままの竹林に入った。指導者役の林業家らが「傘を広げて通り抜けられるぐらいがちょうどいい間隔」などと説明し、数人1組になって伐採に挑戦した。

切り倒すと薄暗い竹林に光が差し込む。1時間半ほどかけて伐採できたのは約40本。家族4人で参加した同市須磨区のパート宮場亜理沙さん（36）は「近くにこんな生い茂った竹林があるのは驚き。切るのはけっこうな重労働ですね」と汗をぬぐった。

多井畑西地区はバブル崩壊後に宅地開発計画が頓挫し、2020年に市が都市再生機構（UR）から無償で譲り受けたが、耕作放棄地に竹林が拡大していた。そのままだと生物多様性が失われ、タケノコを餌にするイノシシが増えるほか、土砂崩れの危険性も高まるため、市民団体が整備を続けている。市は22年度から年数回、伐採体験を開いて身近な里山に放置竹林の問題があることを知ってもらい、さらに交流空間としての再生を目指す。



放置竹林の伐採体験で、切り倒した竹を運ぶ子どもら＝神戸市須磨区多井畑

■大学生が商品開発

伐採された後や立ち枯れた竹は運び出すのに労力がかかる。山に置かれたままだと景観を悪化させ、さらに時間がたつと分解し、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。

甲南大学では21年度から、学生たちが「BambooにThank you Project（バンブーにサンキュープロジェクト）」として、伐採だけでなく利活用策を検討する。

民間会社の協力を受け、3年間かけて竹ペレットを材料の一部に使った食器類を製品化した。プラスチック代替となるため「エコな商品」がPRポイント。「こうべ竹太郎」と命名し、今年3月に神戸市の東遊園地でマルシェイベントを開き販売を始めた。



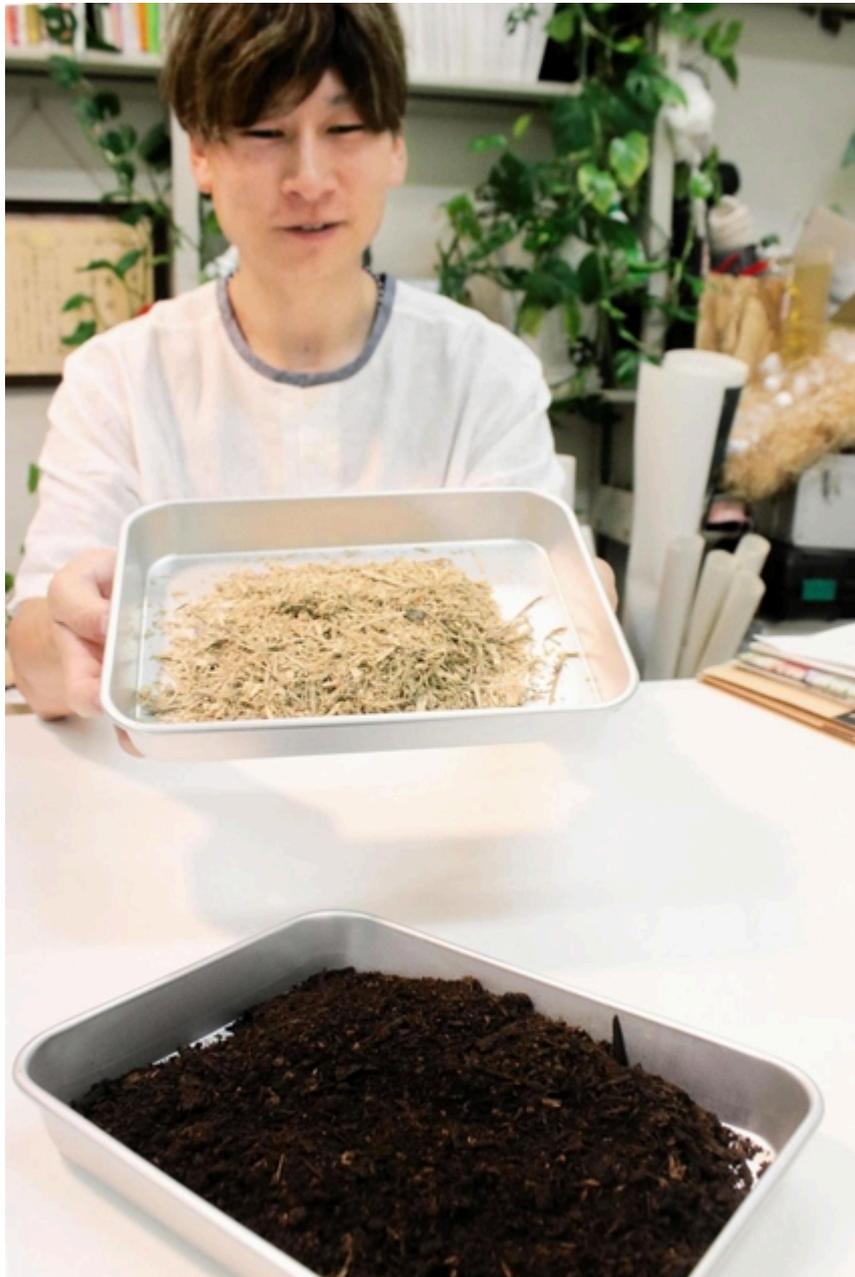
甲南大の学生らが竹ペレットを使って商品化した食器（甲南大提供）

本年度は竹炭の商品化も模索する。リーダーを務める経済学部3年の田中真幸さん（20）は「温暖化などと違い、放置竹林は日常生活で影響が見えないので問題の認知が広がりにくい。自分たちだけで解決は難しいが、活動を通じて問題にかかわる人たちをつなげる役割も担いたい」と話す。

■堆肥化で大量消費へ

放置竹林の拡大は、建築資材や日用品として使われなくなったことが背景にある。神戸市によると、市内で推計千ヘクタールあり、年15ヘクタールのペースで広がっている。

メンマやビールなど食材にも活用されるが、それほど多くはない。持続可能な対策につなげるには、まとまった量の使い道を探ることが必要になる。



竹を使った堆肥のサンプルと、素材の竹チップを手にする神戸学院大の菊川裕幸講師＝神戸市中央区港島1

神戸学院大現代社会学部の菊川裕幸講師（36）は加工した竹チップを花き栽培の土壌に混ぜる実験に取り組み、大量消費を目指して堆肥に活用する研究を進めてきた。

昨年11月にゼミの学生と神戸市西区の竹林に入り、丸1日かけて伐採した竹をチップに加工。約1トンを共同研究する兵庫県佐用町の牛ふん堆肥メーカー「近畿農産資材」に持ち込んだ。牛ふんと混ぜて約4カ月かけて発酵させ、今年5月に堆肥として完成した。



竹を使った堆肥（左）と素材の竹チップ＝神戸市中央区港島1、神戸学院大

竹チップには水分調整の効果が期待できる。生育試験で効果を検証しており、順調にいけば年明けにはホームセンターなどの店頭に並ぶという。

菊川講師は「少しでも収入につながれば、地域住民が持続的に伐採できるようになる。竹林はどんどん増えるのでスピード感を持って進めたい。環境問題の解決につながる商品として付加価値がついてほしい」と期待している。